実践研究助成
特別研究指定校

研究課題

# ともにかかわり合いながら「自分づくり」をすすめていく子の育成

副題

## ～ICTの活用における人間力の育成～

| | |
|---|---|
| 学校名 | **横浜市立立野小学校** |
| 所在地 | 〒231-0845<br>神奈川県横浜市中区立野76番地 |
| 学級数 | 23 |
| 児童･生徒数 | 714名 |
| 職員数／会員数 | 43名 |
| 学校長 | 大内　美智子 |
| 研究代表者 | 大内　美智子 |

## １．はじめに

本校は、『ともにかかわり合いながら、「自分づくり」をすすめていく子の育成』をテーマとして掲げ、平成 20 年度から文部科学省学力向上実践推進校として、社会科･生活科･生活単元学習を中心に研究を進めてきた。研究を進めていく中で、本校の研究主題にある「自分ごと･かかわり合い」の観点において、情報通信技術「ICT（Information and Communication Technology）」を活用することで、学習のねらいにより迫ることができることを実感した。具体的には、授業の中で、教師が材や社会的事象を ICT を活用し提示することで、子どもがその材や社会的事象を身近に感じたり、これまでの認識との違いに気付いたりする様子が見られたことや、子どもが自分の思いや考えを表すときに、拡大提示した写真や映像などをもとに話す様子などが見られたことである。そこで、平成 21 年度からパナソニック教育財団第 35 回特別研究指定校として助成を受け、積極的に ICT を取り入れた教育内容の研究に取り組んでいくこととした。

## ２．研究の目的

冒頭で述べたように本校は、「ともにかかわり合いながら、『自分づくり』をすすめていく子の育成」を研究テーマとして掲げている。その中で ICT が教育活動の中でもつ可能性の追究を研究目的とした。具体的なテーマを「『自分づくり』をすすめる効果的な ICT 活用」と定め、研究仮説として「ICT を日常的に活用できる環境を整え、効果的な ICT 活用を進めれば、子どもたちの『自分づくり』をより豊かにすすめることができるだろう。」と設定した。

また、ICT活用でめざす子ども像は、以下の通り設定した。

**ICT 活用でめざす子ども像**

○ICT 機器に触れ、慣れ、親しみながら学習に取り組む子

○材や社会的事象を自分ごとと捉え、必要なときに ICT を活用して、意欲的に問題解決に取り組む子

○自分の考えを進んで他者に表現し、必要なときに ICT を活用して、ともにかかわり合おうとする子

## ３．研究の方法

研究仮説を受け、二通りのアプローチで実践を通した研究を進めた。一つは、ICT を日常的に活用できる環境の整備を図っていくこと、もう一つは、授業実践を通し、「自分づくり」に向かう学習の中での効果的な ICT 活用を模索していくことである。

**○ICT を日常的に活用できる環境の整備**

ICT を特別なものとしてとらえるのではなく、鉛筆や消しゴムのように気軽にいつでも使える道具となることが理想である。そのためには、教室環境とともに授業内容でも、子どもが身近なところで ICT に触れ・慣れ・親しめる環境を整備することが重要だと考えた。たとえば、身近なところにありすぐに使える状態の ICT を整備することであったり、単元計画や授業の中で ICT 活用を位置付けたりしていくことである。

**○授業実践を通した、「自分づくり」に向かう学習の中での効果的な ICT 活用の模索**

「パソコンだと授業が楽しくて分かりやすい。」この言葉には、二つの側面が考えられる。一つは、ICT の操作が楽しかったり、画面表示が楽しかったりといった ICT そのものの楽しさに関するものである。この楽しさからくる「分かりやすい」は、関心･意欲を高めることはあっても、「自分づくり」につながるとは考えにくい。もう一つの側面は、ICT 活用をすることによって「授業内容が分かりやすくなって、楽しい」という意味である。このような ICT 活用を研究していくことが、「自分づくり」に向かった研究と相互に関連していくと考えた。

## ４．研究の内容と経過

本校では「教材化･自分ごと･かかわり合い」を研究内容として取り組んできた。実際の授業の中では、「自分ごと」として追究していく場面や子ども同士が「かかわり合う」場面で ICT を活用することがより有効であったことは前述の通りである。そこで、ICT 活用の前提となる「ICT 環境の整備」を加え、研究内容（図１）を定めた。また、研究を進めていく中で、有効であった ICT 活用場面はカリキュラムの中に位置付け、意図的･計画的に ICT 活用が行えるようにしていった。

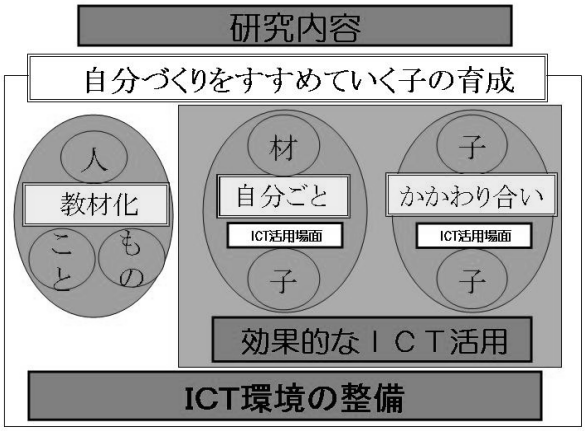



図1　研究内容について

### ICT 環境の整備

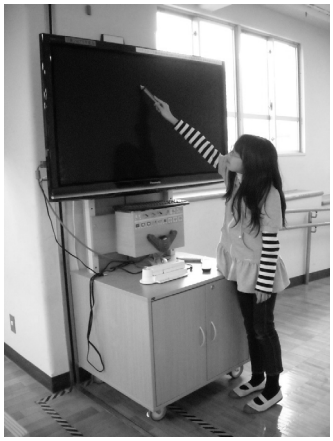
**機器の整備**

研究当初、本校の主な ICT 機器は下記の通りであった。

**研究以前の主な ICT 機器**

| | |
|---|---|
| 電子黒板セット…… | １台 |
| （電子黒板･実物投影機･パソコン･DVD をセットとした機材） | |
| 児童用パソコン…… | 各教室･視聴覚室に 40 台 |
| プロジェクター…… | 各フロアに１台ずつ |
| デジタルビデオカメラ…… | 学校に数台 |
| デジタルカメラ…… | 学校に数台 |

まず、学年･教科で必要な ICT 機器が違ってくるであろうと考えた。助成から、各フロアに電子黒板セットとプロジェクターを１台ずつ設置した。またカラーの拡大印刷機、高学年のフロアの共有スペースに７台のパソコンを設置した。授業では、教師が電子黒板セットを資料を提示するために活用することが多くなった。それとともに、子どもが発表のために実物投影機能を活用する様子も見られるようになった。プロジェクターは、電子黒板セットを他のクラスが使用している場合や学年全員など大勢の人数で見る場合に活用する様子が見られた。カラーの拡大印刷機については、板書を拡大印刷し、教室に掲示することで学習を振り返る時に活用する様子が見られた。共有スペースのパソコンは、子どもが社会科や総合的な学習の時間で調査活動をするために活用する姿が見られるようになった。



電子黒板セット

また、教師が ICT 機器を使用したり、子どもに必要なスキルを指導したりするために、講師やメーカーの方を招き研修会を行った。機器操作とともに、他校でどのような学習場面で ICT を活用しているのかを知ることができた。

ICT 研修会の様子

**単元計画の中での位置付け**

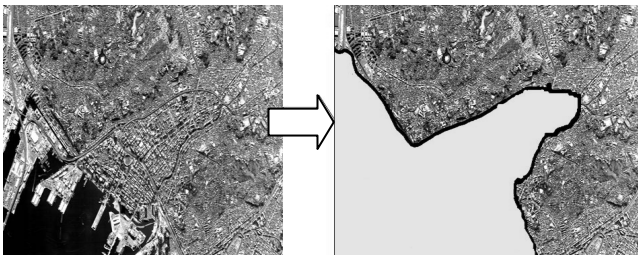
研究を進めていく中で、ICT を活用する場面が授業の中で具体的に見えてきた。単元目標あるいは本時目標の達成のために、どのような意図で ICT 活用を行ったのか、明らかになってきた成果をカリキュラムにまとめていった。

### 効果的な ICT 活用

授業実践を通した、「自分づくり」に向かう学習の中での効果的な ICT 活用の模索をしていく中、具体的な ICT 活用場面を以下のように整理することができた。

**「自分ごと」になるための効果的な ICT 活用**

◆子どもの興味・関心を高めるような材や資料を提示する場面
◆心がゆさぶられるような材や資料を提示をする場面
◆子どもの見方・考え方と「ずれ」が生じるような材や資料を提示する場面
◆子どもが問題解決のための情報を収集、選択、加工する場面



パソコンでの資料作成と提示

ビデオレターの提示

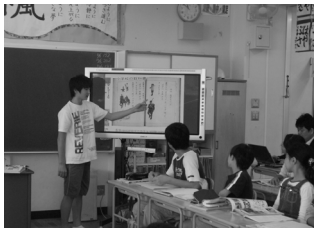
**かかわり合う力を育てる効果的な ICT 活用**

◆子どもの言語活動をより豊かに展開するために材や資料を提示する場面

◆子どもが自分の考えを伝えるために、分かりやすく表現する場面

◆互いの見方・考え方の共通点や、相違点を明確にし、よりよい見方・考え方を生み出す場面

自分のノートを提示



調べてきたことを提示

## 5．研究の成果と今後の課題

**ICT 環境の整備**

実物投影機と大型ディスプレイの必要性を認識していった。利便性や操作性、何よりも支援の効果の大きさを実感できたからである。このことを受け財団の助成等をもとに機器のさらなる整備を図った。各教室にこれらを整備することで日常的に利用され、教師や子どもの操作も向上していった。授業の中では「説明したいから使っていい?」と聞く子どもの姿が、教科を問わず見られるようになってきた。単元計画の中での位置付けについては、どのような支援のために ICT を活用するのか、場面の整理を行うことができた。継続して取り組んでいきたい。

**現在の主な ICT 機器**

| | |
|---|---|
| 電子黒板セット | 各フロアに 1 台ずつ |
| 実物投影機 | 各教室に 1 台ずつ |
| 児童用パソコン | 各教室･視聴覚室に 40 台<br>高学年フロアに 10 台 |
| プロジェクタ | 各フロアに 1 台ずつ |
| デジタルビデオカメラ | 学年に 1 台 |
| デジタルカメラ | 学年に 1 台 |
| カラー拡大印刷機 | 学校に 1 台 |

**効果的な ICT 活用**

**「自分ごと」**

子どもが実体験を行うのが難しい場合や実体験に加えるために、写真や動画を提示したり、インターネットなどの ICT を活用しながら、子どもが自ら求めて調査活動を行ったりした。このことで、より子どもと材との距離を引き寄せることにつながり、「○○さんはね。」など名前や固有名詞で話す姿が見られた。また、写真や動画などで保存し、記録しておくことで、教師が意図するタイミングで子どもに提示することができ、興味･関心を高めることが分かってきた。

**「かかわり合い」**

ICT を活用し、材や資料を可視化、提示することで、それらが共有され話し合いが活発になった。特に、これまでの授業の板書を拡大提示しておくことは、子どもが既習事項を根拠に話し合いをする際、有効であることが分かってきた。自分のノートや調べてきた資料を実物投影機で拡大提示して説明することで、個々の考えを共有することを心がけた。そのため、お互いの考えの違いや共通することを知ることができ、より話し合いを深めるための有用性が感じられた。

今回の研究を通し、子どもの意欲や問題を解決しようとしていく学ぶ楽しさの支援に ICT の活用が大変有効であることを実感することができた。今後も ICT 活用による支援を授業の中で意識していくことで、より「質の高い学び」のある教育活動が効果的に進めていけると考える。

## 6．おわりに

本校の授業実践は、授業公開→協議会→指導講評という研究形態で行ってきた。教師が年に数回以上研究授業を行い、多くの講師の先生方にご指導をいただく中で、少しずつではあるが授業力の向上も感じることができてきた。今回の機会と多大なるご支援をくださった、パナソニック教育財団に感謝しますとともに、常に温かいご指導をくださった横浜国立大学野中陽一先生をはじめ、本校の研究に多大なる貢献を頂きました多くの講師の先生方に感謝申し上げます。